

日本東亞同文書院編

中國經濟全書

6

錢業書局

日本東亞同文書院 編

(第六冊)

中國經濟叢書

常州大學圖書館藏

綫裝書局

第六冊

第三輯（二）

明治四十一年

一九〇八年

東亞同文會

.....
一

第三輯

(二)

明治四十一年

一九〇八年

東亞同文會

第三編 水 運

(甲) 民船業

第一章 總 論

夫レ一國國富ヲ計ラント欲セハ須ク交通機關ノ完全ニ俟タサル可ラス昔時一小局面ニ於ケル經濟生活ヲ營メル時代ニ在テハ必スシモ之ヲ必要トセサレトモ然レトモ能ク永ク其狀態ヲ保ツヘキニアラス西ニ産スルモノハ東ニ北ニ産スルモノハ之ヲ南ニ致シ相互有無相通セサルヘカラサルハ史ノ證シテ明ナル所ナリ而シテ交通機關ハ河川海洋道路鐵道等其主ナルモノトス然ラハ支那ニ於ケル此等ノ形勢如何鐵道ハ近キ將來ニ於テ大々的敷設ノ實アランモ今ハ之ヲ以テ誇ルヘキニアラス其道路又運輸ノ用ヲナサス加フルニ支那ハ四百二十萬方里ノ大版圖ヲ有スルモ僅ニ東南ノ一部海ニ接シテ通航ノ便アルノミ然モ良港灣乏シク會之アルモ皆外人ノ手裡ニ屬シテ亦意ノ如ク自由ナラス

想起シ來レハ此廣漠タル大國內ニ在リテ如何ニシテ交通ヲナセシヤ真ニ怪マサルヲ得サルモノアリ然ルニ獨リ河川ニ在テハ然ラス其中南部ニハ香港附近最モ其便ヲ占メ珠江ハ東西北ノ三大江トナリテ廣東ノ自由ナル舟楫ハ依リテ以テ西廣西ニ入り貴州雲南河內トノ交通ヲ助ケ北ノ方

湖南江西東ハ更ニ福建ニ通ス北上シテ汕頭附近ニ至レハ韓江ノ水ハ其運輸ノ業ヲ輔ケ廈門附近ニハ湄江アリ福州附近ニ閩江アリテ安徽江西ト相通ス北部ニハ七百里程ノ大運河南北ニ通セルヲ始メトシ淮河ハ以テ河南ノ交通ニ便ナルヘク黃河ハ遠ク内地ニ入り白河直隸ニ在リテ舟楫ヲ通ス殊ニ北部ハ又陸運盛ニ行ハル中部ハ即チ長江ノ貫流スル所ニシテ古來東西交通ノ大幹線タリ而シテ此等河川ノ交通機關トシテ支那人カ從來盛ニ用キタルモノハ民船トナス故ニ民船業ニ就テ説明スルトキハ支那ノ交通機關ノ大部分ハ知り得ヘキナリ
即チ本編ニ設カントスル所ノモノハ北清ニ於ケル河川及民船業ノ一斑ナリ

第二章 白 河

第一節 水 路

天津ノ白河ニ於ケル宛カモ我新潟ノ信濃川ニ於ケルカ如シ信濃川ノ水利ニヨリテ勃興セル新潟ハ其積年ノ淤積ニヨリテ却テ今ヤ發達ヲ阻礙セラレツヽアリ天津ノ地タル亦實ニ白河ノ便ニヨリテ通商ノ旺盛ヲ致シ市城ノ繁榮ヲ來セシト雖大沽沙灘ノ障礙ニ加フルニ白河河底ノ年々泥沙ヲ淤積スルカ爲メ船舶ノ出入漸ク困難トナリ明治廿年頃迄ハ日本郵船會社ノ玄海丸(一四四七)カ貨物ヲ滿載シ二十餘呎ノ吃水ヲ以テ容易ニ大沽ヨリ天津ニ溯航スルコトヲ得明治二十七八年

頃迄ハ滿潮ニ際シ天津附近ニ至ルヲ間水深十二呎ニシテ優ニ七八百噸ノ汽船ヲ溯ラシムルコトヲ得タリシカ數年前ヨリ泥沙ノ淤積甚タシク或ハ水深僅カニ五六呎ニ充タサル所アルニ至リ汽船ハ白河口ヲ距ルコト五哩ナル地點ニ碇泊シテ荷物ノ積卸ヲナスノ止ムヲ得サルニ至レリ其後水勢少シク變シテ吃水頗ル淺キ船ハ纔ニ上流ニ溯ルコトヲ得シヲ以テ税關ハ當時特ニ告示ヲ發シテ上流三十哩ヲ溯リタル白塘口ヲ以テ船舶ノ荷物積卸場トナセリ而モ天津埠頭附近ノ水ハ僅カニ六七呎ノ深サヲ有セルノミ爾後其水利益、惡シク汽船ノ交通甚タ困難トナリ當時我輩備艦摩耶號ノ碇泊セル河床ノ如キ其左舷ト河岸トノ間四間餘ニ涉リ泥沙壅塞淤積シテ艦體ヲ埋メ宛然陸上ニ坐スル觀アリシト云ヒ其他米國汽船「モノカシー」號ノ如キ亦深ク泥沙ニ膠坐シテ進行ノ術ナキニ苦シミタリト云フカ如キ以テ如何ニ其航行ノ不便ナリシカヲ知ルニ足ラム去レハ外洋ヨリ積載シ來リシ巨額ノ貨物ハ多クノ場合ニ於テ大沽曳船會社(Tugs and Lighter Company)ノ曳船ニ依頼セサルヘカラス然モ曳船ノ數ニ限リアリ一時ニ巨額ノ貨物ヲ運漕スルコト固ヨリ容易ノ業ニアラス從テ貨物ハ停滯シテ其積卸ニ一週日以上ヲ要スルノミナラス其ノ運賃甚タ不廉ニシテ其額日本天津間運賃ノ三分餘ニ當ルト云フ

第二節 工 事

白河交通ノ不便已ニ上ニ述ヘタルカ如ク年一年其度ヲ加ヘ來リシヲ以テ白河改修ノ議漸ク商人間ニ起リ尋テ領事團ノ決議ヲ經、海關道、稅務司、領事團其委員トナリ明治三十三年始メテ改修ニ着手セリ而シテ當時ノ設計ヲ聞クニ實ニ左ノ如シ

第一 溝渠ニ閘門ヲ設ケ或程度ニ減水スレハ之ヲ塞キ以テ水路ヲ斷ツコト

第二 護岸工事ヲ施スコト

第三 河線ノ屈曲ヲ直クスルコト

以上ハ實ニ白河改修ノ眼目ナリシナリ蓋シ白河ノ航行不便ヲ來タセシモノ其原因種々アルヘシトハ云ヘ就中其重ナル點ヲ見ルニ下ニ記スルカ如キ三點ニ歸スヘキナリ

第一 人民ハ灌溉又ハ交通ノ爲濫ニ溝渠ヲ開鑿シ之ニヨリテ白河ノ水量大ニ減少シタルコト

第二 護岸充分ナラス爲ニ兩岸ノ侵蝕作用劇シク泥沙ノ淤積迅カナル事

第三 河道ノ屈曲甚シキコト

サレハ前ニ掲ケシ三工事ハ白河改修上甚タ緊要ノモノタルハ固ヨリ論ヲ俟タス此ニ於テカ此工事ニ要スル經費ヲ二十五萬兩トシ之ヲ支辦センカタメ直隸總督府ヨリ十萬兩ヲ支出シ別ニ英國居留地ノ保證ニヨリテ香港上海銀行ヨリ十五萬兩ノ居留地債ヲ起シタリ此公債ハ一株二十兩六朱利附ニシテ三年据置キ償却期限十年ノ定メナリキ(但シ利子ハ其後七朱ニ改定セラレタリ)而

シテ之カ償却ニ對シ海關稅ノ一步ヲ課スルコト、ナシ海關稅ト共ニ之ヲ徵收シタリ今其稅額ノ詳細ヲ見ルニ左ノ如シ

一、正稅貨物即輸入外國品及輸出內國品

稅額ノ百分ノ一

一、半稅貨物即輸入內國品

稅額ノ百分ノ一

一、特別貨物即

綠茶及紅茶

稅額ノ百分ノ一、二五

同上露國行貨物

稅額ノ千分ノ三

磚茶

稅額ノ千分ノ四

同上露國行貨物

稅額ノ千分ノ二

阿片

稅額ノ千分ノ三

一、貢米其他官用物ハ免稅

以上ノ經費支辦及其償却法ニヨリ先ツ第一着ニ各溝渠ニ閘門ヲ設ケ次ニ護岸並ニ河道ノ切割ニ着手シ工事ヲ進捗シツ、アリシ間ニ偶、團匪事件ノ起ルアリ之カ爲メ一時該工事ヲ中止スルノ已ムヲ得サルニ至リシノミナラス既成ノ工事モ大ニ毀損セラレタリ事變後各國軍隊ヨリ代表者ヲ出シ都統衙門ヲ組織スルヤ永久ノ利益ノタメ必要ノ事業ヲ經營セントノ議起リ白河改修ノ

問題再ヒ唱道セラレ領事團、都統衙門、稅務司等新ニ之カ委員トナリ其實行ニ着手スルコト、ナ
 レリ此ニ於テ明治三十四年五月九日委員會議ヲ開キ白河改修及改修後ニ於ケル白河ノ保存ニ付
 テ議定シ曩キニ團匪事變ニ際シテ受ケタル損害ノ賠償トシテ九萬五千兩ヲ清國政府ヨリ支出セ
 シメタル外都統衙門ハ白河現狀維持ニ對シ毎年六萬兩即チ毎月五千兩宛補助金ヲ交付シ白河改
 修ニ對シテ經費五十萬兩中其半額ヲ負擔シ他ノ半額ハ各國商業航運業居留地及其他ノ利益ヲ享
 クルモノヲシテ之ヲ負擔セシムルコト、シ各國居留地保證ノ下ニ居留地債ヲ起シタリ然レトモ
 當時居留地トシテ既ニ一公共團體ヲナセシハ獨リ英佛二國アルノミニシテ日本米國其他ハ居留
 地ノ名アリテ未タ其實ナカリシカハ將來居留地ノ經營ヲ了シタル後之カ責ニ任スヘキヲ約シ英
 佛二居留地ハ主トシテ之カ保證ノ責任ニ當レリ去レハ白河工事ニ關スル資本ハ前後七十五萬兩
 トナリ後ノ五十萬兩中居留地債ニ係ル二十五萬兩ニ對シテハ嚮ノ輸出入稅附加稅ト同シク更ニ
 百分一ノ附加稅ヲ徵收シ即チ前附加稅ヲ二倍セリ

一、正稅貨物

稅額百兩ニ付二兩

一、半稅貨物

稅額百兩ニ付二兩

一、特別貨物即

綠茶及紅茶

稅額百兩ニ付〇兩二五

同上露國行貨物

稅額百兩ニ付〇兩〇〇六

磚 茶

稅額百兩ニ付〇兩〇〇八

同上露國行貨物

稅額百兩ニ付〇兩〇〇四

阿 片

稅額百兩ニ付〇兩六

斯クシテ愈々工事ニ着手シ當テ團匪ニヨリテ破壞セラレタル損害ハ全ク修覆セラレシト共ニ同年九月二十五日先ツ Tientsin 閘門ノ閉塞ヲ行ヒ其結果水勢忽チ急ニ居留地ニ沿フテ流レ其水量一時ニ増加セリ次テ十月二十一日河道ノ屈曲ヲ直クセンカ爲メ Tientsin Reach ノ東端ヨリ起リテ Everlasting Reach (卦甲寺ヨリ揚家莊迄) ノ中間ニ達スル約四分ノ三哩ノ掘割ニ着手シ爾後更ニ Everlasting Reach ノ東端ヨリ起シ Vegetable Bund ノ西端 Ho Chia Chuang (下河圈) ヲリ宋家莊) ニ至ル一哩十分ノ一ノ掘割ヲ爲シ前者ハ翌年七月後者ハ同九月初旬ニ竣工セリ此ニ於テ河道ハ從前ニ比シ四哩五分ノ長サヲ減シ且ツ甚シキ屈曲ヲ見サルニ至リタリ又其掘割ノ深々地下約二十三尺ニ達シ約三百二十五呎ヨリ三百六十呎ノ幅員ヲ有スルニ至リシヲ以テ當テ通行スルコト能ハサリシ長形ノ船舶モ今ヤ自在ニ來往スルコトヲ得航行船舶ノ數頓ニ増加セリ但シ之ニヨリテ却テ大沽沙灘ノ淤積ヲシテ一層迅速ナラシムヘシト云フモノアリ兎ニ角此掘割ニヨリ航海汽船ハ七時間若クハ八時間ニシテ天津迄溯航スルヲ得同年十一月二百七十呎ノ長サ

ヲ有スル招商局汽船安平號及ヒ泰順號（一八〇五噸）ノ二艘カ容易ニ航行シ得タリシヲ見レハ少クモ二百六十呎ノ長サヲ有スル汽船ノ航行ニハ些ノ困難ナキヤ明カ也

以上第一第二ノ掘割ト共ニ第二掘割ノ下流ニ於テ更ニ第三掘割ハ一昨年着手セラレタリ此掘割ノ竣工ト共ニ白河改修工事ハ成就セラル、モノナリヤト云フニ然ラス第四第五ノ掘割工事ハ日ナラスシテ其工ヲ起サン第三掘割ハ李家樓ヨリ張溝莊ニ至ル一哩間ニシテ明治三十六年十月下旬工事ニ着手シ昨年八月下旬ニ至リ其竣工ヲ見ルニ至リタリ經費四十萬兩ニ對シ居留地債ヲ起セリ之カ償却ノ方法トシテハ支那商品ニ對シテ海關稅ノ六分ヲ課シ外國品ニ對シテハ海關稅ノ三分ヲ課シ海關稅ト共ニ徵收セリ今其工事ノ落成ヲ見ルニ水深二十三呎ヲ有シ河幅三百五十呎トナリ白河全長ニ於テ五哩ヲ減シタリ第四回ノ設計ヲ聞クニ大趙北莊ヨリ朱莊ニ至ル一哩半間ノ掘割ニシテ工事費五十萬兩ニ對シテハ前例ノ如ク居留地債ヲ募集シ起工セントスルモノ、如シ而シテ第五回ノ掘割ハ蘆家嘴ヨリ鄧善沽ニ至ル約一哩間ノ工事ニシテ是亦第四回ノ掘割ノ竣工ヲ俟テ起工ノ途ニ就クヤ明カナリ是ト共ニ起ルヘキ問題ハ大沽沙灘ノ浚渫ニ在リ抑、北清ノ貿易上多大ノ妨害ヲ加フルモノハ實ニ大沽沙灘ナリトス列國ノ商權ヲ東洋ニ伸ヘ其大國ニ對スルヤ南清及長江一帶ニ於テハ其成功セルヲ見ルアルモ獨リ北清ニ對スル稍、遜色ナキ能ハス大船艙ヲ啣ミテ渤海灣ニ入り春天津地ノ咸アルモ其進ンテ大沽沖ニ到レハ又是レ如何トモスル

コト能ハス唯僅ニ曳船會社ノ手ニヨリテ其貨物ヲ白河ニ進ムルコトヲ得ルノミ之ヲ以テ領事
團稅務司、海關道ニヨリテナレル白河工事委員ト各汽船會社商業會議所員等ヨリ組織セラレタ
ル協議員トノ間ニ議成リ沙灘切開ニ對シ七十萬兩ノ増資ヲ爲シ之カ償却ノ方法トシテ海關稅
額四分ノ河上稅ヲ徵收センコトヲ定メタリ然レトモ沙灘ノ吃水八呎ヨリ九呎ノ汽船ヲ滿潮ノ好
機ニ於テ通過セシムルヲ得レトモ若シ果シテ以上ノ如キ切開工事ノ實行セラルハニ至ラハ吃水
十三呎ノ汽船ヲ通過セシムルコト容易ナルヘク白河改修工事ノ成功ト相俟チテ大ニ天津水運事
業ノ發達ヲ招致スヘキハ勿論現今大沽沙灘ノミヲ通過シ得ル汽船ノ都テカ何等ノ故障ナク白河
ヲ溯航シ得ルヲ見ルニ至ラハ白河改修ハ寧ロ大沽沙灘ノ切開工事ト相俟チテ初メテ完全ナル好
果ヲ收メラルヘキモノナルハ敢テ贅言ヲ要セサル所ナルヘシ

白河工事ニ關シ更ニ言フ所ヲ聞クニ塘沽ヨリ河口ニ至ル河流ノU字形ナルヲ改修セントノ議出
テシモ砲臺ノ建設倉庫ノ増築及鐵道敷設エヨリ頗ル大ナル障礙アリト云フ隨テ其議ノ果シテ成
リシヤ否ヲ知ラス(別紙白河浚渫工事圖參照)

第三章 民 船

第一節 航 路

天津ヲ中心トシテ之ニ總匯スル民船ノ航路數條アリ玉河（一名御河）、西河、北河、東河、海河ニシテ北清貿易ニ資セラル、數千ノ民船ハ皆之ニヨリテ或ハ天津ヨリ内地ニ或ハ内地ヨリ天津ニ貨物輸送ノ用ニ供セラ北洋第一ノ貿易場トシテ天津ノ聲價ヲ維持スルモノ皆實ニ之ニ因ルト云ハサルヘカラス

第一 海河

外人ノ通常呼ンテ白河ト云フモノニシテ天津佛租界ヨリ天津停車場ニ至ル間ニ於ケル鐵橋（萬國鐵橋ト稱ス）ヲ以テ界トシ之ヨリ上流ヲ白河ト云ヒ下流ヲ海河ト稱ス其距離七十餘哩アリ

第二 玉河

所謂大運河ニシテ南運河トモ稱ス北運河ニ對シテ此ク言フナリ天津ヨリ以南山東、河南兩省ニ通スルモノニシテ天津ヨリ山東省德州府ニ至ル間五百八十四浬里德州ヨリ同省臨清府ニ至ル四百十六浬里臨清ヨリ河南省道口鎮マテ六百浬里合計千六百浬里六百五十哩餘ノ長線ヲ有スルモノニシテ二百噸ノ民船ハ優ニ道口埠頭マテ航行スルコトヲ得

天津ヨリ德州ニ至ル間ハ河幅百間乃至百五十間アリテ水ノ深サ平日ハ殆ント四呎ヨリ五呎ノ間ニアリ夏時減水ノ期ニ至レハ積量八百石ノ民船ハ臨清ヨリ直隸省大名府ニ溯航スルコ

トヲ得サル時ニ於テモ德州ハ猶三呎ノ深サヲ有ス

玉河中ニ於ケル大都市ヲ舉クレハ其數多シ去レトモ德州臨清大名ヲ以テ尤モ大ナル波止場トナス而シテ内地ノ貨物ハ此地ニ大輸送ヲナシ以テ河南直隸ニ至リ天津ヨリ來ル貨物ノ三分ノ一ヲ占ムト云フ此地方ヨリ生スル農產物ハ運河ニヨリテ天津ニ送ラレ大名臨清ニ至レハ山西東南出產 貨物之レヨリ天津ニ送ラル又山西ニ輸出セラル、天津ノ貨物モ亦此等ノ地ヨリスルナリ

大船ヲ行ランニハ天津ヨリ道口ニ到ルマテ二十日ノ日數ヲ要ス而シテ土人ハ輸送方法ノ一トシテ數多ノ停船場ト稱スヘキ地ヲ選ビ之ヲ站ト言フ天津ヨリ臨清マテヲ十二站半ニ分テ臨清ヨリ道口ニ到ル間ヲ八站ニ區分ス其舟行通常一日一站トス

臨清ヨリ大黃河ニ至ル運河ハ昔時貢米運搬ノ爲メニ費用セラレ臨清ニ於テ運河ニ會シ其載スル所ノ貨物ヲ積換ヘテ天津ニ出テ更ニ北京ニ送ル東昌ヲ經テ大黃河ニ到ル間ハ一ノ水溜ニシテ開拓ノ業未タ淺キヲ以テ其成功ヲ見ルニ至ラス彼ノ運河ニヨリ貢米ヲ運搬セルモノカ一朝其危ニ遭フテ海運益其用ヲ度スルニ至リタルヲ以テ臨清德州ノ末路果シテ如何ナルヤヲ疑ハシム然レトモ濟南府ヨリ膠州灣ニ至ル二百清里間ノ鐵道布設計畫ト一方天津鐵道ノ延長シ來ルニ會セハ庶幾クハ德州ヲシテ一大市タルヲ失ハシメサルコトヲ得ンカ

第三 東河

天津ヨリ蘆臺ニ通スル水路ニシテ全長六十九哩ノ間幾多ノ民船アリテ運輸ノ業ニ從フ

第四 西河

由來民船ノ交通最モ頻繁ヲ極ムル航路ニシテ天津ノ西南保定ニ通セリ全長百二十餘哩ノ長航線ヲ有ス

第五 北河

南運河ニ對シテ之ヲ北運河トモ云フ北方通州ニ通スルモノニシテ約九十哩ノ舟行路ヲ有ス

西河ト北河トハ天津紅橋ニ於テ合流ス其合流點ヨリ三岔口ニ至ルマテヲ白河ト稱シ三岔口ニ於テ更ニ玉河ヲ合ス其合流點ヨリ下流ヲ海河ト云フ然リ而シテ各河トモ春期ニ於テ八九呎ノ水深ヲ有シ夏期雨季前ニハ五六呎ニ減水スルコトアルモ雨季ノ後ニ至レハ俄ニ増水シテ一丈乃至一丈五尺ニ達スルヲ見ル其結氷ノ期ニ至リテハ一律之ヲ定ムルコト能ハスト雖モ大凡十二月初旬ニシテ翌年三月上旬ヲ以テ開河ヲ見ルヲ常トスルモノ、如シ

第二節 種類